



TITLE:

海外日誌(六)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(六). 天界 1923, 3(31): 239-240

ISSUE DATE:

1923-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159889>

RIGHT:

海外日誌(六)

Yerkes Observatory, Williams Bay, Wisconsin, U. S. A. 山本 一 清

二月八日(木)

昨夜二十時で撮った寫眞と、中村君から送つて來たスケッチと比べて、「中村彗星」の位置が略々わかつたので、國際寫眞天圖と比べて正確な經緯度を計算し、夕方、軌道要素を得た。結果、ほゞペライン彗星と同一なものであることの證據を得た。

正午、ダンビー氏シカゴより歸る。
夜曇り。

二月九日(金)

ダンビー氏午前中は天文台に出てゐたのに、正午から發熱就床、シモヌ嬢も同時に同病! どうも同氏がシカゴ行きで流感を拾つて來たらしい。皆々大警戒。

正午、パークハースト教授獨りナシヴィル市から歸つて來た。きけば、同行したリー氏はシカゴで他に立寄つて、約束の汽車に外れた由。

二月十日(土)

午前中、天文台で讀書やら計算やら。

午後、二人でパークハースト教授を訪問、木曜日にナシヴィル市で行はれたバーナードの葬式の模様などの話をきく。

夕方、リー氏歸來。

二月十一日(日)

午前中、室内に讀書。

午後、リー氏を訪問、ナシヴィルの土産話をきく。パーク氏にも聞き、リー氏からも聞いて、殊に今尙バーナード氏の友人や家などが同市にゐるを知つて、自分も水曜の日、遺憾に付き添つて行けばよかつたと思つた。

二月十二日(月)

島津氏の招きにより、朝七時半の汽車でシカゴ行き。九時過ぎ北

(四〇)

西停車場着、それから直ちにレーキパーク通りの島津氏の宅へ。
午後一時頃飛び出して、下町で買物をしたり、活動を見たり。六時頃、青年會に歸り、それから、同會の創立滿十二年記念晚餐會に出席。二百人餘りのもの、日本食を喜ぶ。十時半閉會。夜は島津氏宅でさる。

二月十三日(火)

昨夜の約束で、今朝八時、ラサル街ステーションに行き、錦織君と會し、今、ユウヨクから來着する川中君を迎えた。それから一先づ青年會に落付き、次で又、一同島津氏宅に移り、こゝで永年ぶりの話しにふける。川中氏の南亞南米談が最も珍らしい。正午には皆々、島津氏の御馳走にあづかる。午後二時から、川中君、ミス橋本、及び吾々二人といふ四人同行、自分が案内役といふ資格で、始めて見るユニオン・ストック・ヤードを見物に行つた。珍らしい大雪降りて道路は悪かつた。午後四時頃、青年會に歸來、それから、又錦織君を加へ、總勢五人で下町を散歩。はげしい雪と風とでやり切れない。芝居を見て、十一時頃島津氏宅に歸る。

二月十四日(水)

午後二時まで、又々島津氏宅の客間で川中氏と話す。今日はヨロツバの土産話から、ひきつゞいて日本の、京都の、話がはづんだ。二時過ぎから英字は附近の洋服屋へ行き、自分は青年會の圖書室で、日本から通信物など見る。夜は美術商森氏と島津氏宅で長い間話す。

二月十五日(木)

午後三時過ぎの汽車でペーに歸る。歸つて見て驚いたことに、度々吾々のシカゴ滞在中、シカゴでもあの通りの大吹雪が吹き續いたが、ペーでは一層此の荒れがはげしくて、風と雪ばかりでない。砂の嵐が吹いて晝も薄暗かつたそふな。なるほど、天文台の外圍には深き四五尺に及ぶやうな雪と砂の山があらちに出來てゐる。室内は、何れの室内も、どこから吹き込んだか、あらゆるものに砂が積つてゐる。

歸つて見れば、ダンビー氏は回復して「今日始めて床から出て來ました。シモヌも明日は起きませう」といって居られる。

二月十六日(金)

昨夜、天文台よりの歸り途に惡寒を感じたが、今朝は氣分が悪い。それでも午前中は天文台へ出て見たけれど、午後には就床した食事室に運んで貰ふ。しかし熱は平熱。只頭痛がはげしい流感では無いと思ふが、用心のためアスピリンなど吞んで見る。

二月十七日(土)

やはり頭痛はひどい。但し熱は無い。終日床の中で眠つたり雜誌をよんだり。

二月十八日(日)

今日は少し氣分が好いので、晝の時から食卓につく。しかし午後にはやはり眠る。

二月十九日(月)

午前中、氣分が好いので天文台へ出て見たが、午後は頭痛のため又々、床につく。夕方に大ぶん快くなつたが、晝間眠つたから、夜眠れない。

二月二十日(火)

午前中天文台へ出る。日本から郵便物がごつさり來た、英子は大喜び。午後、頭痛のため就床。

英子は午前中、村で買物。

今日、ヴンビー夫人俄かに發熱就床。又、例の流感らしい。

二月二十一日(水)

バーナードの死去以來、引きつゞき我がヴンビー家は病人の續發で大弱り。幸ひに吾々兩人共健康になつたが、ヴンビー夫人就床のため、食事に大差支へ。吾々二人は今日、晝食夕食を、パークハースト家に招かれて行く。

ミス・カルグーがナシヴィルより歸つて來た。

二月二十二日(木)

ワシントンの誕生日で天文台は晝の間は休み。

午前中、自分は村へ出で買物したり散髪したり。

夕方、パークハースト氏と共に二十四時塔に上つて魚座S星を撮影。そのため時間がなくなつて、今夜、小學校である男子衆の會食には出席出来なかつた。ヴンビー夫人全快。

二月二十三日(金)

午前中天文台で讀書。

午後、英子少々發熱就床。夕最高溫三十八度九。さういふ流感に取つてかれたらしい。ヴンビー夫人は前の經驗により、いろいろと親切に世話して下さる。

二月二十四日(土)

英子の熱は平熱に下つた。しかし油斷大敵、終日就床中。自分も天文台へは行かず、室内で讀書す。

二月二十五日(日)

午前二時半起床、觀測衣を着て二十四時塔に上る。珍らしや北方の地平線には廣く明るいオーロラが見えてゐる。自分には之れが生れて始めてだ。四十時で觀測中のヴンビー氏も屋上に出て來て眺める。大きな光芒がユラユラと動きひらめくのは全く壯觀である。三時から自分は二十四時で、乙女座U星や獵犬座星雲や大熊座セー星などを撮影す。

日曜だけれど、終日室内に居て、英子の世話をする。熱は低い。

夕食後、少し頭痛を訴ふ。

二月二十六日(月)

今朝、英子床離れ。

日本より來信、桐生の進から、ヴンビー家のミッシン嬢へ年賀狀が届く、自分は之れを英譯して、嬢に渡す。大喜び。

自分は午前中から計算。夜は寫眞のプリントをした。

天文台の掲示板には「パークハースト夫人が今日ロビンの鳴くのを聞いた」と出た。いよゝ春が來るのだ。

銀河

星簇淨如レ水雨晴輝似銀循環分晝夜練帶卷穹旻
飛星

星飛忽然去光跡不相連瞥見爲妖怪人間屢畏天

岡山 池田 喜太郎